商いの新しいものさし

㈱商い創造研究所
代表取締役
松本 大地

第122回

ポートランドからの道標①「サステナブルとコーヒー」

コロナ禍の中において、新しい日常とは何か。働き方、暮らし方まで価値観が大きく変わろうとしている。価値観とは、物事の価値についての個人、世代、社会の基本的な考え方であり、今までの延長線上の価値観に縛られず、さまざまな方法、考えを実行する時代になってきた。

筆者の仕事や人生の価値観が大きく変わったのは米国オレゴン州ポートランドとの出会いだった。1997年に東京・お台場で開催されたタイガー・ウッズの初来日時に、米国ナイキ社の大型プロモーションイベントを担当、翌年の長野オリンピックではナイキがスポンサーとなった米国チームのコミュニティ施設を手がけ、ポートランド郊外に本社のあるナイキ社との付き合いからポートランドとの縁が始まった。サステナブルなライフスタイルや街づくりに刺激を受けて独立、本紙でのツアーを含め視察同行者は700人を超え、サステナブルな業態開発、都市計画、街づくりの価値観を共有してきた。

時代に挑むスタンプタウン創業者とバルニバービ佐藤社長

日本でも5年ほど前からポートランドのライフスタイルに触発され、店舗デザインや、現地ファッションや飲食店をリーシングする動きが続き、最近では象徴的なエースホテルも開業した。残念ながら多くが短命に終わったのは、単なるトレンドとして表面をマネしただけで、根付いているライフスタイルの本質を捉えなかったのが要因。是非とも大きく変わる価値観に対し、再度ポートラン、ドが培ったリベラルな生活文化を理解することが肝要と考えている。

メジャーではない地方都市のポートランドになぜナイキが本社を構え、コロンビアスポーツやアディダス米国本部があり、エアービーアンドビーなどのユニークな企業が進出するかは、生活文化を大切にするサステナブル社会であるからだ。サステナブルとは持続可能の意味であり、変化する社会の中で多様化しながら進化を続けていくこと。それは経済活動だけでなく、地域社会を営む政治やコミュニティ、街づくりまでサステナブルで1本の筋を貫いている。

ポートランド住民を呼称する「ポートランダー」は、〝人生を楽しくするセンス〟がある。米国は東部と西部では3時間の時差があり、ポートランドでは朝の早い時間に出勤し、夕方には早めに終える働き方スタイルが広がる。朝の風景は、馴染みのバリスタが注ぐコーヒーを嗜んでオフィスに向かう、朝から元気にさせてくれる朝食専門店で1日のスタートを切る人が多い。

そんなライフスタイルからサードウェーブコーヒー店が育ち、質の高いレストランが増えていく。夕方になると街では地元クラフトビールでハッピーアワーを楽しむ人々、レストランのテラス席からは賑やかな風景が滲み出す。コーヒーからヘルシーな野菜や果物や卵料理の質の高い朝食、研鑽を続けるシェフが作り出す食事、フレンドリーなサービスと、「食べる」ことは幸せに過ごすために欠かせない行為だからこそ、生産、商品、販売・調理の好循環を持続可能にするサステナブル性を重んじる。

「スタンプタウン・コーヒー」はポートランドを代表するコーヒー焙煎とカフェ経営企業。美味しいコーヒーを作り続けるには、コーヒー豆原産地での栽培指導や買い付けを直接行い、産地の人々が持続可能な暮らしができるフェアトレード契約を結ぶのもサステナブルが根底にある。また焙煎技術やバリスタ育成教室を開催するなど、街中にレベルの高いカフェが広がった。時代をリードする新進気鋭の飲食店であるバルニバービの佐藤裕久社長とのポートランド視察では、スタンプタウンの創業者と会うことができた。門外不出で囲うのではなく、公開することでさらに新しいコーヒー文化が生まれるとの考えを持っていた。

人口65万人のポートランドは、「環境に優しい街」「アメリカ美食の街」第1位に選出された。「コーヒーを愛するのも人々は幸せに過ごすため」という思想こそ、新しい価値観のコロナ禍での道標ではないだろうか。

新たな生活文化づくりへの挑戦が求められる今、次回以降もポートランドが説く本質を深掘りする。